

「男らしさ」について

― 自伝的考察 ―

1…新聞記事の違和感

2025年12月29日の毎日新聞朝刊の一面に衝撃的な見出しが躍っていた。「60年前野球に壊された少年」。

そして引き継がれた十面の見出しは「引き継がれた軍隊精神」「少年野球に『男の道』」「性的役割縛った体育」だった。一体どういう記事だ？との思いから全部目を通してみた。というのも、私は野球を始め、スポーツが嫌いだからだ。やるのも嫌い、見るのも嫌い。スポーツ、とりわけ野球には良い思い出は皆無だったからだ。

記事の冒頭にこの話はジェンダー史の研究者で2年前に『壊された少年 排除と屈辱のジェンダー史』という本を出し、そこに「あれ以来わたしは野球はしたくないと思いつつ続てきた」と記者は書いていた。

記事によればこの本はジェンダー史研究者の内田雅克さんの自伝史だという。

話はこうだ。

小学4年だった内田さんはある日の放課後、クラスメートから半ば強引に野球に駆り出された。人数合わせか、それとも野球が苦手な者への嫌がらせか。

「おまえ、責任バッターだからな！」。2死で打席を迎えた内田さんは、そう言われたことを覚えている。結果は三振。「カス」「死ね」「気持ち悪い」。容赦なく罵声が飛んだ。苦痛だった。なぜ自分だけが責任を問われるのか。自宅の裏手にある空き地から、押し黙ったまま家に帰った。内田さんは体が小さく、色白な子だった。「女の子のような少年だった」。自著には、こう記した。「この顔、この身体、この性格が『女みたい』だからいけないのだ」

これ以後十面に続く記事の内容は、如何に戦後史に於いて野球が「男らしさ」の表徴だったかに紙面を費やしていた。記事を読んで違和感が残った。

その自伝的書の書名は『壊された少年 排除と屈辱のジェンダー史』。ここには少年を壊したものは野球だとは記していない。なのに新聞記事のほうは「野球に壊された少年」。

この違和感に引かれ、『壊された少年 排除と屈辱のジェン

『ダー史』(2023年風媒社刊)を読もうと、さっそく紀伊国屋書店インターネット仮想書店のサイトで探した。幸い一冊だけあって、すぐに手に入れることができ、12月31日の午前中に届いたので一日かけて読んでみた。読んでみてすぐ違和感の正体が分かった。

内田少年を「壊した」のはジェンダートラブルだったのだ。

ジェンダートラブル―性別によって要求される「らしさ」からの逸脱―による排除と屈辱に苦しみ、そしていま、発達障害 ASD の診断を受けた筆者の過去と現在、そして未来をここに語る。序章の冒頭にはこう記されており、「まえがき」の冒頭にも、

この世に生を享けるとき、

この顔と体を与えられた。

この性格と嗜好が備わっていた。

それらが偶然にいわゆる「女性的」であったなら、性別に沿って「こうあるべき」「こうであるはず」という枠組みからの逸脱が、わたしをトラブルに陥れた。ジェンダー・トラブル。原因は「女っぽい」という一語に集約される。集約は拡散を招く。「だから気持ち悪い。カス・死ね！」と罵詈雑言を浴び、暴力に晒される。さらに根拠のないセクシュアリティの断定と侮辱に至る。

と。

色白で華奢な小さな体格で、性格も大人しく、人前で話すことも、人を押しのけて前にできることもできない。こうした「女性的」であるが故の排除と差別。

内田さんの人生はこの排除と差別に晒された人生であり、これは小学校入学から、中学・高校・大学、そして就職、最初は一般企業、修士課程を終えてからの学校教員時代を通じて、「女性的」であるが故の排除と差別を受け続けた人生。

これから逃れたのは大学教員となつてから。そしてジェンダー史に興味を持ち研究者となつて、自らの人生がまさにジェンダートラブル―性別によって要求される「らしさ」からの逸脱―による排除と屈辱に苦しみ、満ちたものだったこととその原因背景を明らかにしたことで、彼は排除と差別による屈辱から解放された。

『壊された少年 排除と屈辱のジェンダー史』は、内田さんの屈辱に満ちた半生と、それからの解放に至った研究の道とその成果を、簡潔にまとめた書だったのだ。

だが先の記事を書いた記者が強く関心を抱いたのは、野球が「男らしさ」の表徴を担ってきた歴史の方だったのだ。

だから記事の大半は野球が「男らしさ」の表徴となった歴史に割かれ、内田さんの屈辱の歴史の一部分にのみ焦点が当てられたのだ。

2…凄惨な「いじめ」の日々

内田さんの自分史は、まずそれぞれの項・それぞれの章の冒頭に〈鮮やかな場面〉として、ご自身が受けた「いじめ」の実態を赤裸々に告白する。そしてこのあとに、この「いじめ」が生み出された背景を歴史として詳しく考察する体裁を取っている。

この〈鮮やかな場面〉だけを書きぬいてみると、その凄惨な「いじめ」の日々が浮かび上がってくる。

・「二年生は、はじめての絵の具に手を染めた。水道場で壁に絵の具の手形をつけて、こどもたちははしゃいだ。みんなのあとにおどおどとまねをしていたら、その担任の女教師が血相を変えて、怒鳴りこんできた。「ウチダーっ！ おまえの母ちゃんに全部掃除させるからなっ！」。一瞬のうちにまわりには誰もいなかった。」

小学校一年の時の体験。大勢で悪戯していて最後になっておずおずとそれに参加した内田少年。担任の女教師は、最後におずおずと参加した一番弱い子だけを標的にしたのだ。教師も子供のいじめに手を貸している。

同じく教師が加担した場面。

・「男子だけで遊んでいたとき、はじめての集団からのいじめというものに遭遇した。予兆、虫けら扱いの始めだった。泣

きながら担任に救いを求めると、形相を変えた女教師はまたも「こらっ！」とわたしを怒鳴った。」

・「課された掃除をしなかった生徒がいたとき、担任は生徒を校庭に男女二列に並ばせ、「きちんとやったという者は一步横にでなさいっ！」、その声は荒々しかった。ほぼ同時に女子全員が動くのが分かった。僕は掃除をきちんとする男の子だった。だから、出た、横に。重い空気を首に感じ振り向くと、後ろには誰もいなかった。」

この場面で教師が内田少年にかけたことばは、「あなたは女子の間に混ざっていきなさいっ！」と顔いっばいに皺を寄せた般若の形相の教師は、そう投げ捨てた。背後から嫌悪に憎悪が被さった視線が突き刺さる。その痛みは、悪い予感を連れていた。

同じく小学校一年の体験。学校はいつでも男女を分けたがる。だから真面目に掃除をやったから横に出ただけで、男子の列から外れた気まずさの中にたじろいだ内田少年の心には教師は気付かず、「女々しいやつ」との男子の蔑視に加担する。

・「先生に怒られるのは決まっていた。生活習慣が出来ていない子、勉強の出来ない子、給食が食べられない子、そしてジエンダーを彷徨っている子、学力やスポーツに優れた子たちは、叱責される理由を持たなかった。」

教師は生徒を様々に差別していた。だから生徒間の差別をも感じないし、問題にもせず、むしろそれに加担した。

・雨水を吸い込んで不気味なほどの生命力を持って傍若無人に成長する雑草のごとく、集団による排除は蔓延っていった。可視化された外見や性格の特徴が水となる。身体が細く、骨格も華奢で、色白で、顔だちも女性的だった。吐く寸前のような不快感をその顔いっぱいにして、横にいた子に「見ろよ、あの唇」と中田（仮名）はすれ違いざまに吐いた。」

この体験は見事なほど「いじめ」の有様を抉り出している。そして凄惨な「いじめ」の日々の中で内田少年自身の心が壊れていく。

・「わたしはわたしで、ひたすら自分を責め、嘆いた。この顔、この身体、この性格が「女みたい」だからいけないのだ。トランプのポーカーのように”全取り換え”を繰り返した。叶わぬ願いを、幾度も繰り返した。」

現実の目の中に入り込んでくるのは、「努力」の二文字だった。人としての尊厳を奪われた少年に示され、そして少年が受容したのは、自己に責任を見出し、努力によって自己を変革していく道筋だった。」

内田少年には、「君はありのままが良いのだよ」「そのままですばらしいのだよ」と言ってくれる人が身近にはいなかったということだ。

彼はひたすら「男らしく」なることを求めて、なんどもなれども裏切られ、さらに傷を深くしていったのだ。内田少年自身が「男らしさ」に囚われ、「男らしくなる」ことで地獄から逃れられると考えたことで、さらなる地獄にからめとられたと言えよう。

第一章「学校と少年」でしめされた「いじめ」による排除と侮辱の凄惨な様子は、男子の大部分とこれに同調した女子の一部による「女つぼさ」を理由にした差別と排除に苦しみ、これに不感症であまつさえ時として同調してしまう教師の態度であった。

第二章「スポーツと少年」で述べられる野球を巡る黒い歴史は、ジェンダー・トラブルのほんの一部分にすぎなかったのだ。

3…スポーツとジェンダー

第二章はスポーツとジェンダーを直接扱った個所だ。

ここでも〈鮮やかな場面〉を追ってみよう。

・「お前責任バッターだからな！」。ツーアウトで打席が回って来ると、そう恫喝してくる。野球―学校が終わると、同じクラスの男子が集まって野球をする時代だった。公園のグラウンド、団地の中央広場。人数合わせか、偶然か。ほんの数回そこに入れられたことがあった。空振り、落球、ここぞと

ばかりに罵声を浴びる。遊びでもスポーツでもない。ただの苦痛だった。」

スポーツが嫌いという訳でもなく、すべてのスポーツができないわけでもなかった内田少年が野球が嫌いになった瞬間だった。

だが避けていた野球が、教員になってみると付いて回った。どこの高校でも職員親睦野球が付いてきた。職員の90%以上を男が占める私立男子校。「野球をやらないやつは教員じゃない」とまで言われた。

大学教員になって何よりよかったことは、この「職員野球」への強制からの解放だったと内田氏は記している。

このあと内田氏の考察は、戦後、これまでは男らしさの表徴は軍人だったのが、野球に変わっていった有様を詳述する。そして小学校の高学年になったころ、球技大会は野球からサッカーへと姿を変え、中学校では野球とサッカーとが男子の花形部活動となったことを記す。

第二章の第二部は、「部活動とジェンダー」。

・「野球帽、あるいはサッカーのストッキングを履いていれば、「認められた」男子となり、一定のステータスを持っていた。そして、女子の眼差しの対象となった。「モテる」「モテない」の分かれ道。」

・「中学に入ったころ、テレビは「女子むき」のアニメ、『アタックNo.1』と、『あしたのジョー』は男子に。どれを見ても勝負。勝つことに向けて、スポーツの際のある主人公が、うさぎ跳びをしながら「根性」なるものを見せていた。」

1957年生まれの内田氏の育った時代は高度経済成長期で1964年の東京オリンピック後の世界。オリンピックを前にして中学校競技のそれまで県単位しかなかった大会を全国レベルに広げ、オリンピック選手の裾野を広げてスポーツを国民的行事に押し広げた時代。野球だけではなくバレーボール・サッカーなどが脚光を浴びた時代だ。

野球では巨人V9の時代に丸被り。V9（ブイナイン、ブイきゅう、ブイク）とは、読売ジャイアンツが1965年（昭和40年）から1973年（昭和48年）まで、9年間連続してプロ野球日本シリーズを制覇したことである。この期間をV9時代ともいう。

だからだろうか、内田少年は中学校で居場所を探して、バドミントン部へ入った。だが、

・「そこにも男子の意地悪が待っていた。そもそも私は、あの「トレイニング」が耐えられなかった。「根性なし」はやられる。」

そしてここにもいられなくなって内田少年がたどり着いた先は「社会科部」。

ここでせっかくスポーツから離脱したのに、高校でも再び運動部を巡る。

・「スポーツをして鍛えなければならぬ、たくましくならなければならぬ」と思い込んだ私は、男子高校の運動部を廻る。しかし、いつも三か月で限界を迎えた。走る、また走る。苦痛でしかない。また自分だけが脱落する。逃げる。部活に行かずには帰宅する。・・・「だから、何をやってもダメなんだ。辞めてはいけない」。その言葉は十分すぎるほど説得力をもち、自分で納得し、自責する。しかし耐えられなかった。」

そもそも男子校を選んだことが間違いの始まりだ。成績も良い方なのだから、都立の共学校にして、部活も文化部にしておけば、地獄に足をからめとられることもないのに。

・「男子校へ進学した後も、男子集団は何より恐怖でしかなかった。スポーツ有名校でもないが、運動部の声を出してのトレーニングやランニングには閉口した。「声を出せ!」と幾度も怒鳴られた。うつむいた沈黙が、わたしの答えだった。」
・「先輩、思えば歳も一つか二つしか違わない子どもにどれほど威張られ、服従を強いられただろう。」

内田少年は最近の50台となった写真を見ても小柄でぼつちやりした色白の男性だ。足は速いが、大人しい性格はそのままだったのでないだろうか。出しゃばるのが嫌で、隅に隠れていた少年。

こんな「女の子っぽい」少年が男子だけとなる中学校や高等学校の運動部に在籍すること自体が無理であると思う。ましてや男子だけの高等学校をえらぶとは。

「男らしさ」の呪縛から逃れるための選択を内田少年は行わず、逆に自ら「男らしくなる」ために運動部を選び、男子だけの高等学校を選び、そしてここでも運動部を選ぶ。

「女っぽい」少年が「男らしさ」をもとめて奮闘する様は地獄でしかないと思う。

そして大学を卒業してのちの教員生活でも、なんと男子校を選んでしまう。底なし沼の恐怖そのものだと言える。

小学校時代の体育は男女一緒だが、中学になると男女別になる。そしてスポーツ競技もまた男女別である。

この男女を別にする世界でしかも運動能力を競う世界。こんな世界をわざわざ選んでしまうほど、内田少年の「男らしさ」への呪縛は強力だったと言える。

4…私自身のこと

①「女っぽい少年」

第一章でつづられた「女っぽい」ことをあげつらった排除と差別の様は、私自身にも経験があり、内田さんの述べたことは、実感を伴って受け止めることができた。

私自身、色白で丸ぼちやの少年。そして大きな声を出すこともできず、物おじして人前には出たがらず、大人しい少年であった。

記憶はないが、母によると、幼い時にはいつも近所の女の子たちと一緒におままごとをして遊んでいたという。母が愛用して来たおおきなテイベアのぬいぐるみをおんぶして。

子供の時から好きなことは、絵を描いたり工作をしたり、折り紙をしたり。特に絵を描くことは得意だった。幼稚園でも小学校でも描いた絵が、しばしばコンクールに入賞して展示された。

最初に入学した小学校、横浜市立豊岡小学校での最初の七か月間。放課後野球をして遊んだという記憶はない。野球ができる場所は、大都会鶴見の真ん中にある小学校のグラウンド以外は広場が町になかったし、余りに生徒数が多いので、小学校は午前と午後の二部制に別れて授業をしていたので、放課後日暮れまでの間にグラウンドが空いていることもなかった。

のも理由かもしれない。

野球をするようになったのは、一年生の11月に三重県三重郡朝日町の朝日小学校に転向して以後のことだと思う。

東芝の社員の社宅。100軒以上あったと思うが、山すその主として平社員の住居の長屋群と中腹の幹部社員の住居の一軒家群の間に大きな広場があった。そして朝日小学校は二部制ではなかったので、放課後たつぷりと遊ぶ時間があつた。小学校が終わってからこの広場でしばしば野球をやつた。

だが私は極端な運動音痴。バットを振ってもボールに当たらず三振だらけ。たまに当たっても足が遅いので、一塁ベースにたどり着く前に返球されてアウト。また腕の力も弱く遠くまでボールを投げられないし、飛んできたボールをグラブで取ることもできずに落球。しだいに野球からは遠のいた記憶がある。

そして結構夢中になったのがチャンバラとそり遊び。当時始まったテレビ放送のハイライトは赤胴鈴之助。さらに広場の横には山の中腹を削って広場を作つた際の削り残しのガケ山があつた。そこから段ボールのそりで滑り降りるのだ。

これらならさして運動能力は問われない。

②「文化活動」に熱中

だが私がもっとも熱中したのは、模型作りと書道教室だった。

木を削って模型を作るのは高価だから、紙をボンドで合わせて塊にして、これを削って模型にした。まだプラモデルの最初期だからプラモも高価だった。

そして転校した翌年二年生の春。社員住宅の一角の長屋で書道教室を開いている社員がいた。ここに六年生の夏に転校するまでずっと通った。頻度は覚えていないが、熱心に通ったことは確かだ。この先生は既存の書道界に属していなかったのではないか。生徒に級や段を取らせることもなく、コンテストに作品を出品させることもなかった。ただひたすらに先生の手本を参考にして、見て眺めて考えて、手本と同じに書けるようにひたすら稽古する毎日。

これに没頭していた。

もう一つ夢中になっていたことは、読書だ。幼い時から絵本の読み聞かせを両親から受け、本好きになっていった私(弟・妹にも)に、両親はどんどん本を買い与えた。愛読した書としては、子供用のシートン動物記、子供用のファーブル昆虫記、科学の歴史を説いた少国民の科学、そして世界童話全集などなど。

内田少年とは異なり、足も遅く、運動会の徒競走はいつもビリだった。一度だけ運動会でトップを取れるチャンスがあった。障害物競走だ。なんと最後の梯子くぐりの前までは断トツのトップ。でも丁度目に物貰いが出来ていて眼帯をしていたのが、被っていた三角帽子が梯子に引っかかって、帽子が眼帯をずり動かして物貰いが破れてしまった。そこで戸惑

っているうちに全員に抜かれて、またしてもビリ。

こんなわけで早いうちから運動には見切りをつけていたの
で、小学校でのクラブ活動は模型クラブ。そして中学校に入
ってから、内田少年のように、運動部を目指すというような
こともなく、最初から希望したのは、美術部と書道部。結局
書道部に入って三年間書に勤しみ、あとは音楽部と書道部。結局
才能もあつたのか、音楽の担当の先生に呼ばれて、三年間、
文化祭での混成合唱とリード合奏に参加していた。

野球は三重で出会った。そしてプロ野球では南海ホークス
の全盛時代。投げてはエース杉浦、打ってはホームランバッ
ター野村が活躍する南海ホークス。野球はほとんどできない
くせに、南海の試合は結構見た。

だが六年の二学期早々に横浜の学校に転校。そして中学は
川崎市。

東京近辺では南海ファンなどもおらず、スポーツと言えば、
家の庭で(90坪の敷地に約30坪の家、庭は約60坪もあ
った)父とキャッチボールすることと、家族でバドミントン
をする程度。

「男らしさ」の表徴である野球からは、早々と退出し、ス
ポーツではない文化活動、模型づくり・折り紙・絵、そして
書道と音楽。

③ トップクラスの成績

勉強は小学校の時はまあまあ。酷いのは体育。逆上がりも懸垂もできず、ボールを投げても遠くまでいかない。足も遅く女子の早い子にも勝てない。

だから体育は1。

中学に入って勉強は体育と英語以外はかなり良かった。

一年次では、九教科の得点での学年順位は450名中150番位。10クラスあったので、クラスの中では10番の少し下。体育は小学校以上に嫌いになった。マット運動。前転すらできないので、途中でマットから外に外れて、取り組む回数を誤魔化す。跳び箱、脚力も体のバネもないから、三段がやっと。五段ではどんとお尻について終わり。50m走をすれば10秒もかかる。こうした個人の運動能力が問われる競技が中学ではずっと増えたし、毎年運動能力テストというも行われ。嫌がおうにも自分の運動能力ゼロの現実を突きつけられる。

中学に入ってサッカーやバレーボールという集団競技が入って来た。だがドリブルは出来ないし、シュートしてもゴールには届かない。バレーでボールを受けて前に出すことも出来ず、しばしば落球または場外に。ましてスマッシュなど、ジャンプ力が弱いのでネットの上に手が出ない。個人としての競技能力が低いので、集団になっても、仲間に迷惑をかけるだけ。

器械体操のように個々人ではないぶん、集団プレーになり、

サッカーでは私にパスしても仕方がないので皆スルー。ただ走っているだけの45分間。バレーはレシーブもままならないのだから、仲間からはブーイングの嵐。

中学でも体育は1。これでは高校進学に差し障るのでテストを頑張っただけでなんとか2に。

社会・国語・理科・数学はなんとか5だが、なぜ勉強するか意義がわからず、ただただ暗記を強いる英語には学習意欲すらわかなかった。結果は1か2。美術と音楽と技術科は得意なのでテストは90点以上で5。

こうして英語と体育だけ1か2であとは5といういびつな状態だった。

それでもテストの点数は九教科なら、2年次には100番を越え、3年生の時は450人中で10番前後に。

④まったくモテない

子供の時は丸ぼちゃで色白。「女みたい」と言われたし、大人しく悪戯もしないので、友達と言えば女の子が多かった。

だが中学に入り思春期となると、背も伸び160cm台になり、父の系統で、眉や髭が濃くなり、指や手の甲まで真っ黒の毛が生えそろうた。

これで「女みたい」と言われることはなくなった。

だが逆に小学校時代女の子の友達が多かったのに、中学ではまったくゼロという状態になってしまった。

勉強はまあまあ次第にトップクラスになるのだが、女の子の注目を浴びやすい運動はからっきし。体育祭やマラソン大会、そしてクラス対抗球技大会でも、隅の方になるべく隠れていたのだから、女の子の注目を浴びるわけではない。

その上一年の時、私は朝が弱くてしばしば遅刻していたのだが（あまり毎日に近く遅刻するので、一年の後期の委員選出時に、担任の代わりに出席を取るかかりである秩序委員にさせられてしまった。いつも遅刻するやつを任命すれば他者は絶対に遅刻にならないというわけだ。あまりに悔しいのでこの半年間は遅刻しないように頑張ったが、皆より早く来て校門で挨拶と服装点検をする週番はさすがにきつかった）、この遅刻常習のときに、同級生の女子の一人が学校をさぼって遊んでいるのを見かけてしまった。気になったので担任に話したところ、女子全員からシカトされてしまった。ありえない嘘について女の子を陥れた罪だというのだ。これ以後女子にはなるべく関わらないことにした。

⑤ 「弦楽合奏」に熱中した高校時代

この音楽は高等学校に入学したとき、音楽部入部という形で、三年間夢中になった。

しかも合唱ではなく弦楽合奏。

美術部に入ろうと思って県立川崎高校の校舎の横にある芸術教室に行ったとき、美術室の隣の音楽室の前の広い廊下で、

2年生が数人の1年生にバイオリンの指導をしていた。その2年生の態度はとても優しくそして丁寧だった。思わず聞いてしまった。まったくの初心者ですが弾けるようになりませんか。「もちろん、夏までにはかなり弾けるようになるよ」が答えだった。

すぐに入部した。

何と音楽部弦楽合奏班の2年生はヴァイオリンを弾くこの一人だけ。でもこの先輩は、ヴァイオリンだけではなく、ピオラもチェロも指導してくれた。先輩は威張ることも横柄になることもなく、いつも穏やかに優しく接し教えてくれた。

3年生は数名いた。ヴァイオリンの人・ピオラの人・チェロの人。でも3年生は時々しか顔を出さず、出てきても練習を見守るだけ。

おかげで、部活動にありがちな先輩という暴力に出会うこともなかった。

弦楽班の1年生は、

1st ヴァイオリン

山下・村野・内藤・長谷川・守谷の5人

2nd ヴァイオリン

柴田・川瀬・山中・内藤・佐藤の5人

ヴァイオラ

高柳・野島の2人

チェロ

森・小貫の2人

合計14人だった。

これに2年生の藤野先輩が1stヴァイオリンに加わり、総勢15人の弦楽合奏。

2年生が一人だったこともあり、顧問が事実上いない弦楽班は、曲決めも当初から皆でやった。

これは翌年私たちが2年生になってからも続いた。

1年生は少なかった。

1stヴァイオリン

今田・林・北村 の3名

2ndヴァイオリン

今泉 の1名

この4名が藤野先輩が抜けた穴をうめ、早計18人の弦楽合奏になった。

特に二学期になってから転校してきた今田さんのヴァイオリンの技量は高く、これに、2年生の同じく幼少時からヴァイオリンを習ってきた村野を合わせて、2台のソロヴァイオリンとの弦楽合奏も演奏可能になった。

このためどんどんバロックの名曲に挑戦するようになり、毎日放課後、そして日曜日、さらには長期休暇も毎日音楽室に集まり練習に明け暮れた。

2年生は全員男だったが、喧嘩することもなくいつも和気あいあい。1年生の林と今田が女性。二人とも幼少時からヴァイオリンを習ってきた人なのでかなりの技量。

1年生も2年生もなく、皆で競い合い助けあつての音楽活

動だった。

そしてこれは私たちが3年生になっても続いた。

通常受験を控えた3年生は引退するが、私たちの多くはそのまま活動した。1年時の14人の中で引退したのは1stヴァイオリンの守谷と2ndヴァイオリンの山中・内藤・佐藤の4人。あと残る10人はそのまま活動した。

こうなった理由の一つは新1年生がゼロだったことでもあったであろうが、3年生の音楽愛が強かったとも言えよう。

2ndヴァイオリンが少ないので長谷川が1stから2ndに移り、

1stヴァイオリン

ソロ…今田・村野

合奏…内藤・山下・北村・林 6人

2ndヴァイオリン

川瀬・長谷川・柴田・今泉 4人

ヴィオラ

高柳・野島の2人

チェロ

森・小貫の2人

この14人態勢で活動をつづけた。

この2・3年生14人の弦楽合奏は3年生が卒業した年もそのまま一年間学外で継続した。

高校に入って初めて女性を好きになった。

一年次にいつも私の隣の席になる綺麗な女性。私も彼女も極度の近視なので一番前の席でないと黒板の字が読めない。だからだいたい私の隣は彼女。しかも彼女は美人であつただけではなく才媛だつた。ものすごく勉強ができるのである。

好きになつても中学時代のトラウマがあるから、声をかけたり付き合つたりはできない。なるべく彼女の側にいるだけ。

例えば文化祭でのクラス参加で出し物を準備するのだが、この年は「アメリカナイズされた日本」というテーマでいろいろ調べて展示することに。このため近くのスーパ―などに出かけて商品名などにどれだけ外国語が使われているか調べるのだが、其の際はなるべく彼女のいるグループに入つて同道する。また展示に手間取つて下校時刻を過ぎても準備していたときには、二人は共に南武線で帰るので一緒に帰り、彼女の下車駅である矢向駅で下車して彼女の家まで送つて行った。

二年次もまた同じクラスで席は隣だつた。

残念ながら三年次は隣のクラス。

部活も違うのであるべく側にいようという目論見すら実行できずに終わった。

もう一人好きになつた女性がいた。

2年次の二学期転校してきて、音楽部弦楽班の独奏ヴァイオリン奏者になつた彼女。

小柄で可愛くて。

3年次の夏の本栖湖合宿では夕食後二人で毛布に包まり、湖畔でずっと星を眺めていた。

また彼女もまた絵が好きなので、合宿のハイキングで五湖台という峠に上つた時は、峠から富士五湖を眺めながら一緒にスケッチをした。

ただこれ以上の付き合いにはできなかった。

⑥「研究」に勤しんだ大学時代

大学は一浪して入つた。

大学には弦楽合奏もオーケストラもなく興味深いものはなく、大学は学ぶところと割り切つていたので4年間部活動には入らず、講義にしっかりと参加するとともに、図書館で自主研究を続け、それ以外に同学年の友人10人程度で、美術館・博物館めぐりをした。何しろそれぞれの専攻は、日本史・東洋史・西洋史・考古学と全分野に及んでいたし、刀剣研究会というマニアックな会に属したメンバーもいたので、美術館・博物館に行つてもかならず誰かしら解説係をすることができたからだ。

さらにこのグループの活動は校外にも及び、しばしば巡つた地は鎌倉だつた。

私の自主研究テーマは

1年次前半・シルクロード文化交流史

1年終わりから2年次・世界の革命史

そして3年次には教科書の在り方が気になったので皆で「歴史教科書を検討する会」をつくって毎週集まって検討した。

音楽からは離れたように見えるが、自分自身としてはリコーダーを購入して一人演奏していたし、渋谷にはクラッシックを流してくれる音楽喫茶が二軒あったのでこれをしばしば梯子して音楽に浸り、ヤマハ楽器にいった様々なレコードを購入していた。

こうみると全くスポーツに触れていないように見えるが、楽しみとしてはやっていた。

高校時代がサッカーが盛んになった時代だ。しかも体育教師がかなりいい加減な人で、しばしば体育の時間にも自由にサッカーをやらせてくれた。

だから試験前で部活動がないと、空いた校庭を使ってサッカーを友達とやった。

これは大学でも続いた。

前記のグループはサッカー好きなので、東急田園都市線のたまプラーザ駅のそばにあった大学のグラウンドをしばしば借りてサッカーを楽しんだ。

4年次はいよいよ卒論に取り組まねばならない年。

世界の革命史に熱中し、イギリス革命・フランス革命・ロシア革命など次々に調べ、なぜ市民革命は社会改革が先にな

されてから政治革命がなされるのに、どうして社会主義革命では、政治革命のあとに社会改革がなされるのか。ここが疑問で調べた。結論は、最初の社会主義革命が起きたロシアでは、資本主義はまだ爛熟期にもなっておらず最初期だったので、共同共生社会はまったく影も形もなかった。政治革命成功後に国家権力を使って社会を変えるしかなかったというもの。

この研究の課程で明治維新は市民革命なのか絶対王権の確立だったのかという伝統的なテーマにぶち当たり検討した結果、日本は近世江戸時代にすでに資本主義的経済体制が発展しており、藩ですら自ら商社となって地域の殖産興業に勤めなければならなかった現実を見て、すでに社会が封建社会から資本主義社会に変わっていた。この社会変化と欧米列強による植民地化という危機に直面してなされた政治革命が明治維新。つまり市民革命だったというのが私の結論。

関心がどんどん日本近代史に向いていたので、東洋史で卒論をどう描くか迷った。

ちょうど良い時に高松塚古墳壁画が発見された。

発掘が始まったのは1972年3月1日、石室に壁画あることが見つかったのが3月21日。

ちょうど卒業旅行として奈良京都の旅を計画していたので、奈良では高松塚を見に行くことに。

調査中で入り口は封鎖されていたのだが、道路伝いに行かず、地図を頼りに北方から田んぼのあぜ道伝いに行ったので、

運よく規制線をさけて発掘現場に直接入ることができた。「国学院大学考古学科の学生です」と言ったら責任者が石室の入り口を見せてくれ、説明してくれた。

この壁画の人物の服装が朝鮮高句麗の貴人のそれに似ていたので、被葬者は帰化人ではないかとの意見が出され、さらに古墳の位置する場所からみて皇族だとの意見も出され大論争になった。

この帰化人うんぬんの議論に興味がわき、帰化というのは文明レベルの高い国に低い国の人が移り住んでその国民となるという政治用語なので、この奈良時代に当てはめるのはおかしいと感じ、調べてみたら、日本こそが東アジアで冠たる大帝国内の「皇国史観」が背景にあることが分かり、この誤った歴史観が古代日朝関係史研究に歪みを貫らしていることに気が付いたので、卒論は「古代日朝関係史研究史上の諸問題」ということにして文献を読み漁った一年となった。

「研究」と友人との遊びに邁進した四年間のように見えるが、この四年間はまた激しい恋をした四年間でもあった。浪人して入った一年次。同じクラスにとっても可愛い女性を見つけた。一つ年下だった。

話しかけてみたらとても話が合った。10人程度のグループの仲間でもあったが、しばしば二人だけで喫茶店に入り浸ったり、音楽喫茶で終日クラシックに浸ったり、二人だけで美術館にも行ったりした。

二学期ともなるとますます二人だけの時間が増えていった。この時はつきりと彼女との結婚を意識した。

だがこの恋は叶わなかった。

邪魔がはいったのだ。

なんと親友だと思つて居た奴が、彼女の出生の秘密を大っぴらに言いふらし、それを私が言いふらしていると吹聴したので。

彼女は烈火のごとく怒った。そして絶交された。

人を介して私の気持ちを伝えたが時は既に遅し。

2年次になったとき、なんと彼女は彼女の秘密をばらしたアイツの彼女になっていたのだ。絶望だった。

これが2年次3年次と続いた。

3年次あいつは彼女に振られ、彼女は新しい彼氏といった。背の高い平連の活動家。

その後アイツは、10人程度の仲間の中の外の女性と付き合い始めた。

この人もなかなか可愛い人だった。歳は同い年。彼女も浪人からの入学。しかも最初の一年は夜間二部在籍で、2年次に転部して昼間のクラスに入つて来た人。

二人が余りにイチヤイチャしているので、むらむらと対抗心が湧いた。あいつから彼女を奪ってやると。

三年次の後半から四年次は、これに費やされた。でも奪い取ることではできず、またも絶望の毎日。

こうして大学四年間は終わった。

⑦ 中学教師時代

就職でも一浪した。

24歳の春、川崎の中学校に社会科と国語科兼任で採用された。

この中学でも内田氏と同様に、職員野球が行われていた。だから当然仲間に入れられた。だが余りの下手さ加減にあきられて、やがて単なる応援団に。

内田氏のように揶揄されることはなかった。

職場が優しかったからだろうか。

この職場ではバドミントンをやった。

転勤して二年目に来た人がバドミントンの顧問を長くやり、教育に対する考え方も近かったので教えを受ける中で、一緒にバドミントンをやるようになった。

仲間も何人かに増えたので、放課後、部活も終わって生徒が下校したあとの体育館でしばしばバドミントンをした。

これはいわば楽しみ。

技量や運動能力を揶揄されることもない、楽しい時間だった。

一年目に部活動は卓球を押し付けられた。

まったくのスポーツ音痴の私に卓球の指導ができるわけも

ない。

二年目。幸い他校で長く卓球の顧問をしていた人が転勤してきたので、この方に代わってもらい、運動部顧問から早々と離脱した。

代わりに始めたのが歴史研究部。この部はやがて1977年12月の麻生台横穴古墳群の発見を契機に1979年には考古学研究部と改名して地域の横穴古墳を調査。この調査が終わった1984年からは再び地域史に目を向け、王禅寺の開闢伝説・麻生不動尊の開闢伝説、そして亀井城研究と次々とテーマを見つけて研究に勤しんだ。

1988年に転勤した先では最初から部活は文化部とした。38歳のベテランになっていたので新任時とは異なりわがままが言えた。

書道部があつたので名目的顧問にさせてもらった。

4年目。ようやく歴史研究部を創設。近所の二子神社にある謎の供養塔の研究に勤しむ。かなり研究が進んで連合文化祭で発表となったとき、なんと研究メンバー全員が勝手に他の部に転部していたことが判明。新しくできたコンピュータ部。元に戻るよう説得したがダメ。結局連合文化祭発表の準備と本番だけメンバーを借りる形で決着。このメンバーが卒業してしまうと事実上部員はいなくなり休部状態。これは2003年の退職時まで続いた。

この中学校でも職員野球はあり、転勤時には誘われたが、

やはり余りの下手さ加減から、すぐに応援要員に。

この中学ではスポーツ重視の姿勢が強かった。目的はなんと非行防止。毎日くたくたになるまで練習に励めば、非行に走る暇もないという考え。この考えの人が多かった時期には、歴史研究部を創部しようとしたら、そんな役に立たない部活は要らないと言われた。

だが暴力を振るう教員が居なくなるとこうした声も消えた。

5・内田少年と私との違い

幼少時から色白で性格もおとなしい「女の子っぽい」少年であった。

ここはまったく同じ条件。

だが内田さんは今でも後遺症に苦しみ、私は至って元気。

この差はどこから生じたのだろうか。

①：「男らしさ」への拘りの有無

いろいろ条件の違いはあるが、決定的に違うのは、内田少年が「男らしさ」にこだわり、努力して男らしくなろうと、終始こだわっており、嫌いな野球以外のスポーツを部活動として選び、苦戦していたが、私は、早々と「男らしさ」には見切りをつけ、絵・模型・書道・読書・音楽など、文化活動

に目を向け、そこを居場所としていた。

ここが決定的に異なる。

他には

②身体条件の違い

内田さんは成長期を経て大人になってからもずっと色白で「女の子っぽい」ままであった。だからいつまでもこの身体の特徴を揶揄された。

わたしは成長期に髭も体毛も頗る濃くなり、色白はそのままでも、すっかり「男らしく」なったので、「女の子みたい」と揶揄されることはなくなった。

③人付き合いの違い

内田さんはずっと、引っ込み思案で人との付き合いが苦手なままだった。距離の取り方がわからないと書かれている。暴力的対応をされるのではないかと常にびくびくしていたり、逆に優しくされると必要以上に甘えてしまうと。

私の場合は引っ込み思案はどこかで消えてしまった。中学時代文化祭などでリード合奏や合唱で人前に立つことになれ、高校時代にさらに弦楽合奏に夢中になったことで、さらに慣れたのだと思う。

そして大学。一浪した分だけ、人前にたち、人をリードす

ることを嫌とは思わなくなっていた。そして大学闘争を経験したことで、人と論争することも出来、口ではそうそう負けないとの自信もあった。

④家庭環境の違い

内田さんの育ったご家庭は、かなり重い物であった。

父は旧華族の婚外子。妻を亡くした後の子守女中を孕ませ、認知もせず。しかもその女中を母として育ったのでもなく、その女中の下の妹が、やくざに身入れしていて親からの勘当を解く代わりとして引き取るという条件で育てられた。悲惨な家庭環境の中で継母は若い男と駆け落ち、継父に家を追い出され、チンピラとなった。その後徴兵され従軍し、左足を銃弾で傷つけられて帰還した。戦後の職業は消防士。やがて結婚し、女・男・男の三人の子供を得た。内田さんはこの末っ子の男の子。

だが父親は、仕事は熱心で学歴もなくてもしつかり勉強したのでそれなりに出世したが、家では妻や子に暴力を振るう暴君。

農家育ちの母は、この夫の暴力と極貧の生活に耐え、子供たちを育てた。

そして内田さんが小学生の高学年から勉強に目覚め良い成績をとれるようになる期待し「教育ママ」となったという。

この家庭環境では、父母ともにこどもの置かれた精神状態

に目を向けることは無理であったろう。

私の場合は大いに異なる。

父は東大出のエリート社員。台湾の下級官吏となった父譲りの努力家でもある。母は同志社高等女学校出。その父が京大工学部教授という科学者でもあり、その母も高級官僚の娘ということ、世間一般よりは上流の家での育ち。ただし母は、両親ともに晩年の年行つてからの子であるがゆえに、14歳から家事をやってきたしつかりもの。

父はその妹と弟二人の面倒を見ながらも、家族をしつかり養い、母と話し合つて子供たちには本をたつぷりと与え、それぞれの精神状態もしつかり把握して育てた。

この状態だから、困つた時には相談することも可能であつた。

⑤育った環境の違い

内田さんが育った杉並区の旧西田町。現在は 成田西町。

もともとは農村地帯で、田端という東西に分かれた旧村が、明治になって西部が西田町となり、東部が東田町となり、その後、両者の中間にあつた成宗と合体し、今では成田西・成田東となった、その西の部分。西田はずつと農村だったが成宗には住宅地が進出し、ここに官僚や医者の家が出来ていく。そして西田の端には朝鮮人部落もあった。地域を貫く善福寺川の河辺。他には中央にうず高く積まれたごみの山の周りに

あつまる屑屋長屋。

社会の垣塙のような地域で、様々な差別が渦巻いていた。

このため内田さんは多様な背景をもった子供たちと、幼少時から小学校・中学校と15年間も濃密に過ごすことに。

私が育った町は、横浜市鶴見区諏訪坂。繁華街鶴見を見下ろす丘の途中にあった東芝の社員住宅。周辺にもいくつかの社員住宅があり、一番仲良しの女の子の家は日本鋼管の社員住宅だった。でもここは二歳のときから六歳まで。

父の転勤で移り住んだ三重県三重郡朝日町。農村の真ん中に東芝の巨大な白物家電工場ができ、その社員住宅が、工場の西、関西本線のすぐ北側の丘陵地に作られた。大きな溜池と山を切り崩した広場を真ん中に、上は幹部社員用の一戸建て住宅。下は平社員用の二軒長屋。小学校に行けば村の子とも同級だが、家に帰ればこの社員住宅の子としか付き合えない。父は最初勤労課長代理、その後勤労課長・総務部長となり、最初の二軒長屋から上の一戸建てに移動。総務部長はこの社宅でも上から三番目の地位。工場長―副工場長に次ぐ地位だ。

同じ会社の工場勤務者の家族だけだから、付き合うのは同質の家庭。あるのは幹部と平の差だけ。

ここに六歳から十一歳までいた。村の子で友達はいなかった。皆、東芝社員の子。そして友達のお多くはその後皆、父親があちこちの工場に転勤して行ってバラバラになったのだから、ある意味皆幹部社員の子。やはり階層別の環境だった。

そして父の転勤でさらに六年次には横浜市港北区日吉本町。

この町はずれの田んぼの中に東芝の社員アパートがあり、こどもを含め近郊の丘を切り崩した新興住宅地を学区とした日吉台小学校下田分校が私の通った学校。丁度社員アパートには同世代はいなかったもので、学校で付き合ったのは、下田地区の新興住宅地の子供たち。十一歳から十二歳になる半年だけ。

最後が中学になって移った川崎市多摩区長尾。この広大な桃畑をつぶして、100軒を超える一戸建て住宅が建てられ東芝社員に分譲された。100軒の大部分は静岡県の富士工場の工員が丸ごと移住したもの。父はこれの中で数少ない元本社勤務。それも当時は川崎の工場の総務部長。100軒の住宅の社員たちで最も偉い。

ここでは同い年は6人。男3人女3人。男の一人は私立中学だったので、一緒に稲田中学校に通ったのは男2人女3人。この中で誰とも三年間同じクラスにはならず、同じ部活もいなかったもので、三年間ほぼ没交渉だった。

そのうち女子2人が同じ高校に行ったので、少し付き合いは始まったが、だれとも三年間同級にはならなかったし、部活も違った。

住宅には、一年下二年下にも同じ部活はいなかった。

中学で付き合いのあったのは、この長尾村の住人と隣の宿河原町の住人。長尾はほとんど農家だが、宿河原は商家もしくは様々な会社の社員住宅の住人と大きな市立住宅の住人という多様な構成。

三年間割と仲よくしたのは、男ばかり。井上・野瀬、これは市営住宅の子、そして湯本・幸田、これはそれぞれ別の会社の社員住宅の子。でも全員部活は違ったが、時々お互いの家を訪問して遊んだ。

だがそれぞれ別の高校に進み、その上多くが親の転勤で転居したため、付き合いは中学時代で終わり。

私の部活は書道部。多くは女生徒。だから部活に友達はいない。

三年間あまり濃密な人間関係ではなく、ある意味、自分の世界に閉じこもることが可能な環境だった。

生まれたのは内田さんが1957年。昭和32年。私が1950年。昭和25年。

7年違うが、ほぼ同世代と言って良い。だがその生まれ育った環境は大きく違った。

6・内田さんはなぜ「男らしさ」に拘ったのか？

ここが最大の疑問点だ。

そしてもう一つ、どうして人との適切な距離が取れなかったのか？

これが二つ目の疑問だ。

これを解くヒントがある。本書の冒頭の序章にある一言。

内田さんは現在、発達障害・自閉スペクトラム症の診断を受け、その後遺症に悩んでいるということ。

ネットで調べてみるとこれは、対人関係が苦手・強いこだわりといった特徴をもつ発達障害の一つだと。最近の調査では子どものおよそ20〜50人に一人が自閉スペクトラム症と診断されるともいわれている。男性に多くみられ、女性の約2〜4倍という報告があるという。その原因は不明だが、生まれつきの脳機能の異常によるものと考えられており、育て方や環境によるものではないとのこと。

大人でもこれは見られ、対人相互作用とコミュニケーションの障害、関心と活動の限局性(感覚過敏または鈍麻を含む)によって特徴づけられるとのこと。

いやはや。

内田少年が「男らしさ」に拘り続け、努力して男らしさを獲得しようと拘り続けたのは、この脳機能の障害によってだったのだ。

そして人との距離の取り方がわからないというのもこの障害が原因。

自閉症そのものが認知されたのは1943年。そして知的障害が目立たない自閉症である「アスペルガー症候群(Asperger Syndrome)」が知られたのは1944年。自閉スペクトラム症とされたのはなんと2013年とのこと。ごくごく最近のこと。

これでは内田少年の子供時代、周囲に彼の「障害」に気付く人はいなかったのも頷ける。

だが障害と認識はしなくとも、彼が「女っぽい」ことを理由として揶揄・蔑視・差別・排除され苦しんでいることに気が付いた大人は、適切な対処方法を指南できたはずである。

しかし不幸なことに、内田少年の周りにはこのような大人は皆無に等しかった。

いや幼年時代にはいた。

近所の駄菓子屋のおばさん。そしていつも相手をしてくれた親戚や近所の大人たち。内田少年は幼年時代、この人々の暖かな眼差しの下、可愛がられ穏やかに過ごしたという。

これが一変したのが小学校入学。

「女っぽい」ことを理由に彼をいじめる男子生徒集団、そしてこれに同調する一部の女子生徒。さらにこれに気付かず、時としていじめに同調してしまう教師集団。

これに小中高と悩まされた。

さらにこれは塾でも続き、ここでもいじめに同調してしまう塾講師たち。

学校に関わる大人たちの多くが、生徒の心に目を向けていなかったのだ。

私の場合、小学校では多くの優しい教師に出会った。人見知りをして集団に溶け込めず、しばしば教室でお漏らししてしまう私を庇ってくれた低学年担当の男の先生。高学年も同

様な優しい男の先生だったし、転校した横浜の小学校の先生もとても優しく、しかもこの先生は学級活動をとっても活発に組織し、班ごとに毎週班新聞を模造紙もしくはガリ版印刷で出させ、授業でもしばしば調べ学習とその発表、さらに討論を組織してくれたので、勉強がとても好きになったことを覚えていて。また六年の二期からの転入生だった私が集団に溶け込めるよう、さまざまに気を配ってくれていた。

こんな先生に内田少年が出会っていれば、もっと早くに「男らしさ」から脱出し、自分の好きな楽しい世界を見つけられたのではないかと思う。

人の人生には、周囲の人間関係が大きく関わっているのだ。

(2026年1月7日記す)